書き抜き読書ノート 1999	2014 年 10 月 31 日

松永澄夫著「価値・意味・秩序―もう一つの哲学概論：哲学が考えるべきこと―」東信堂 2014 年 4 月 25 日刊を読む

１．哲学的仕方での考察を通じて見えてきたことが、特に「哲学が考えるべきこと」である。それを私は「価値・意味・秩序」という三つ組みで表した。何事であれ人が関わる事柄は、この三つ組みのうちでどのような位置を占めるかを考えることでよく理解できるものになる、このことを念頭におくことで、人の事柄を解(ほぐ)し、見通しの良さを得ることができる。では、どうしてこの三つ組みなのか。

２．（１）人間はさまざまなものの価値を時間の相のもとでみる。たったいまの現在における何かの価値ということだけでなく、近い将来にはどういう価値をもつものとなるだろうか、というような見方もするということである。

（２）そこで、価値は意味の次元の事柄となる。未だ到来しない未来の事柄は意味という姿でしか私たちにとって効力あるものとはならない。

（３）そうして、同じように私たちは、特に人が関わることでは現在の事柄がよってきたる過去をも考慮するのであり、過去も過去としては意味の姿でしか甦らない。意味の世界は物的世界とは違って取り留めのないところがある。

（４）けれども、それは大きな効力をもち、人は意味が力をもつ世界に生きるのである。それは、私たちが自然の中で、また人々がつくってきた人工的な物的環境の中で生きるという基礎の部分でもそうなのであり、私たちは社会的存在として生きる以上は、意味の世界を媒介にそれらに対するのである。

３．（１）それから、時間の推移という展望のもとで事柄をみるということは、秩序を欲するということである。そのときそのとき、闇雲(やみくも)に生きているというのではない。秩序があるということは私たちにとって重要なことである。

（２）しかるに、さまざまな意味事象は相互に内容を与え合って、あれこれの秩序をつくる。

（３）もちろん、すべてがきちんと１つの秩序に納まるというのではない。それどころか、価値事象を巡る争い、評価の人々による違い、意味が時に自在に変貌すること、このようなことを通じて、秩序は生まれたかと思えば滅び、他の秩序とぶつかり、有りようを変え、あるいは滅ぶ。

（４）そうして、このように単一でもなく固定されてもいないからこそ、私たちは繰り返し「どうしよう？」と問い、新たに始めなければならないこともあるのである。

４．（１）この地球のどこかで、周りの人々と一緒に私たちは生きている。

（２）人間が歴史的社会的に形成してきた、見晴るかせない幾重にも張り巡らされる広狭さまざま

でそれぞれに違った性格をもつ集団とその文化や制度があり、人はそのどこかに位置して、自分ができることをし、あるいは、ふっとただ佇(たたず)むだけであるかのごとくいて、とにもかくにも生きている。

（3）そうして、この生きていることが価値あることであり、自分の生が或る誰かにとっても意味あることであって欲しいと、誰も願うのではないか。生を肯定したいのではないか。

5．（1）それができるかどうかは希望に属することかも知れない。

（2）しかしながら、希望をもつために、そうして強く生きてゆくために、人の生の諸条件を順序よく確認してゆくことは望まれると私は確信している。

（3）その諸条件の有りようを、価値と意味と秩序との三つ組みから理解したい。

［コメント］

毎年 11 月の第 3 木曜日は「ユネスコの世界哲学の日（UNESCO World Philosophy Day）」。本書の著者である私の尊敬する松永澄夫先生は、立正大学教授、東京大学名誉教授である。先生は、人が関わるあらゆる事柄の基本的筋道について、言葉による地図を作成することを目指す。そのために、自然の一員としての生命体、動物である人間における自己性の問題をはじめ、知覚世界、意味の世界、社会の諸秩序などがどのようにして成立し、互いにどのような関係にあるのか、その順序に注意を払って考察している。伝統的哲学が育んできた緒概念や言葉から自由になって、日常の言葉で一つ一つの語にあらためて適切な内容を盛り込みながら叙述してゆくことを心がけている。食に関する文章が高校の国語教科書に掲載。「哲学なくしてユネスコなし」。11 月は「ユネスコの世界哲学の日」の月でもある。哲学が考えるべきこととして「価値・意味・秩序」を松永先生とともに本書をたよりに考えたい。

― 2014 年 10 月 31 日林　明夫記―